

赤潮・貝毒監視事業

勢村 均・井岡 久・山根玲子

島根県では、昭和57年から61年まで、水産庁委託の重要貝類毒化対策事業によりイタヤガイ、ムラサキイガイおよび毒化原因プランクトンを対象に、毒化モニタリングを実施したが、その後環境保健部による定期検査で対応していた。しかし、平成4年に県下ではじめて規制値以上の麻痺性貝毒が発現し、原因プランクトンの性状から、今後も発生が予測されたため、貝毒のモニタリングが必要となった。本調査は、県下3地域の毒化原因プランクトン（下痢性、麻痺性）を対象に、発生量の変動をモニタリングし、発生条件を推定するとともに毒化予知の可能性を探ることを目的とする。本事業の詳細は、『平成6年度赤潮・貝毒監視事業報告書』を参照されたい。

要 約

1) 恵曇港内の水温および比重の変動

恵曇港内では、表層と底層の水温および比重はほぼ同様であった。水温は、6月上旬に20℃を越え、7月18日に26.7℃の最高値を記録した。比重は、平成5年と異なり、20.0から24.0の間を変動した。

2) 貝毒原因プランクトンの出現状況

(1) 浜田

下痢性貝毒原因プランクトンの *Dino. fortii* は、出現が観察されなかった。麻痺性貝毒原因プランクトンの *Alex. catenella* は、5月23日から6月27日にかけて40～360細胞/ℓ出現し、5月31日から6月8日にかけて多く出現した。また、6月8日までは栄養細胞のみが出現したが、それ以降は運動性接合子も出現した。*Alex.* の出現時の水温は、18.1～21.7℃であり、珪藻類の *Nitzschia* や *Leptocylindrus* が優占したときに観察された。

(2) 恵曇

下痢性貝毒原因プランクトンの *Dino. fortii* は、出現が観察されなかった。麻痺性貝毒原因プランクトンの *Alex. catenella* は、浜田より約1か月遅れて、6月22日に80細胞/ℓ出現した。6月27日には320細胞/ℓと増加したが、7月1日には、運動性接合子が観察され、それ以降は出現が観察されなかった。出現時の水温は、21.0～24.0℃であり、珪藻類の *Chaetoceros* が優占したときに出現した。

(3) 浦郷

下痢性貝毒原因プランクトンの *Dino. fortii* は、出現が観察されなかった。麻痺性貝毒原因プランクトンの *Alex. catenella* は、恵曇よりさらに約20日遅れた、7月11日に栄養細胞と運動性接合子が出現した。浜田や恵曇で観察されたように、運動性接合子は栄養細胞の出現した後から出現するので、栄養細胞が出現し始めた時期は、6月中旬であったと推察された。また、7月11日に優占したプランクトンは、他の2地点と異なり、鞭毛藻類であった。